

## 第5回未来の京都創造研究会 摘録

1 日 時	平成21年6月23日（火）午後6時30分から午後9時20分まで
2 場 所	交通局3階大会議室（サンサ右京内）

事務局： 本日は、乾委員，松中委員，リムボン委員から御欠席との連絡をいただいている。前回に引き続き、特定非営利活動法人 環境市民の堀孝弘様に御参加をお願いしている。

由 木： 4月1日に着任した。市長からこの研究会が大変面白いとお聞きしており，楽しみにしている。ただし，本日が最終回であり，残念だ。

### 1 重点戦略について

新 川： それでは，重点戦略（案）について議論していただきたい。前回，一度研究会の場で発表していただき，意見を頂戴し，その後，改良を加えられていることと思う。前回と同様，各ユニットから説明いただき，意見交換をしていきたい。

#### （1）Aユニットからの説明

古 川： 中間報告時ではブレーキがかかっていたが，その後，議論を重ねた。人との交流と  
A ユニ  
ットメ  
ンバー  
という基本的立場から，文化・観光・産業・農林業に人材育成の観点を加えて検討を重ねた。その後，委員から総花的になったとの厳しい指摘を受け，改善したのが手元の資料である。

人材をいかに育成し，京都の強みにつなげていくのか，という視点を持ち込んで，絞り込んで議論した。

大きな芯になる部分は，育成と活性と集積・交流とし，ひと，産業，まちのレベルで京都の力を上げていこうという趣旨である。これを複合的に推進する組織として，「いちびりコンソーシアム」というものを設立してはどうか，と考えている。広い視野，新たな発想を持つ，京都発の付加価値向上のための組織として考えている。

既存の行政組織としての枠組みにとらわれない独立実行部隊を設立して，大学・地域・企業，マーケット，京都ブランドの育成に取り組んではどうかと考えている。既存の公務員という発想を取り除き，フレックス制や年俸制を導入してはどうか，という発想である。

神 吉： 事前の打合せ時には，京都の魅力，強みがどこにあるか，という観点を質問されていた。国宝級の歴史資源，象徴的な資源があるだけでなく，当たり前のように古いものや伝統あるものがあって，ものすごい質と量の資源を上手く活かしていかないと評価されないという，辛い部分があるのが京都の特性。これは強みであるとともに，頑張らないといけない，という話をした。

辻 田： 行政の支援体制の強化について，独立実行部隊というアイデアになっているが，産業振興の部分とどういう風に関係していくのかがよく見えなかったので，今後，教えていただければ。

大 山： 新しいことを行政の中でやるときに，どれだけフレキシブルに動ける組織をつくるか，コーディネートをする人材をつくるかが大切。

さらに、クリエイティブシティとしてのプロジェクトのコンペの提案や、学生の力を活用するという観点があってもよいと思う。

堀： 京都のまちの魅力はアンダーグラウンドというか「隙間」があること。かつては西部講堂とか、吉田寮とか、行政とはかけ離れたところにエネルギーがあった。隙間、隙間があるまちこそエネルギーがあると思う。

新川： 一つ一つ光を当てるとすごいものが沢山あるが、目立たない人、ものも凄いのが京都。こういう人も育てる必要があるという視点、人がまちを育て、まちが人を育てるという視点であった。ブランドというものを越えて、京都というまちがつくられていく。

Aユニットについては、更に内容を充実させていただければと思う。

## (2) Bユニットからの説明

林： 大きくは「京スタイルしたはる？」の下に4つの戦略を掲げている。

B ユニ  
ットメ  
ンバー 観光・環境・交通に生活・産業の観点を加えた。新たな京都型のスタイルを発信するために、いかに融合するか、という視点で議論してきた。

京・ごみゼロスタイルは、環境モデル都市として、新たな2R社会の創造を目的とし、エコビジネスとゴミゼロプロジェクトを掲げている。

吉村： 京・町家スタイルは、京町家での暮らしを通して、環境にやさしいライフスタイルを提案する。景観と観光・環境を融合させ、京都からどんどん発信させていきたい。具体的には、京町家街を創出し、人々が集う場、ライフスタイルの提案、文化と学びの発信を行うこととしている。

中村： 京・交通スタイルは、観光と環境の分野においても交通問題が中心となっている現状を踏まえ、道路ごとに役割分担するなどの方略を提案している。

B ユニ  
ットメ  
ンバー 京・チャリスタイルは、自転車だけが走ることができる道路はないという現状に鑑み、自転車を公共交通を補完する交通手段として位置付けることを目的とし、方略を検討している。

林： 最初のページのように、4つの視点を融合させた戦略としたい、と考えている。

B ユニ  
ットメ  
ンバー

大山： 4つのスタイルを融合させる形で進められればよい。重要なことは、規制する、教育するだけでなく、市民が自らメリットを感じてポジティブに取り組む観点をどれだけ入れていくか。マイカーを規制するにしても、子どもがいる家庭は車がないと非常に不便だし、車をどうしても利用しないといけない状況はある。ニーズ調査をしっかりとしながら、具体的な政策を組み立てる必要があり、このあたりも盛り込んでもらいたい。

空閑： 環境や交通では、ある一定の便利さを失うという視点があるが、ニーズをしっかりと見ないと、ライフスタイルを転換するのはなかなか難しい。コミュニティサイクルなどが徐々に浸透するなどして、ライフスタイルが浸透することを期待したい。

平井： 環境対策を進めていくうえでは、様々な分野と連携することが大切である。特に観光と環境の関係では、生活スタイルや町家での暮らしが環境によさそうだというイメージがあるが、観光に来た方にも裏付けをもって、分かりやすい方法で提示できれば

よい、と思う。交通スタイルについても、効果を提示することが大切である。

堀： 京都はポテンシャルを持ったまちであるが、21世紀も持続できるようなモデルを発信していくという気概が必要である。

神吉： 町家スタイルは夢溢れていると思うが、もう少し踏み込む必要がある。外から来る人々に対し見せることを10年ぐらい進めてきても、町家は減ってきており、厳しくなっているのが現実である。町家は単体で1軒ずつ残すだけでなく本来、集合として環境を成り立たせているものであり、近隣の土地利用と一体的に存在している。京町家を通してライフスタイルを提案する場合、街区、通り全体など都市空間の在り方まで踏み込まないと、弱い気がする。モデル的に、京都駅南部に造ることが提案になっているが、やはり今ある都心市街地全体に町家を再生することが必要。色々な機能等が混在する中で、町家がある状態をどう再生するのか、という踏み込みが必要だと思う。これらの観点は、今回の重点戦略ではなく、一般施策の部分に書かれていると見なせないこともないが、町家の保存は他都市でも取り組まれているので、発信という意味からも、厳しい取組に挑戦する姿勢が必要。

新川： ニーズ、効果を示そう、発信をしていこう、という話があった。まちの空間にライフスタイルが京都らしく息づく、という視点を持って情報発信をしていただくと、上手く収まるのかな、と思った。それぞれのスタイルがバラバラな点もあるので、もう一度理想のスタイルを考えていただき、発信をしていただければと思う。

大山： 心理学が専門なので門外漢だが、街並みについて私見を。ヨーロッパの街並みでは、統一された旗や布をかけるなどが行われている。Bの景観やAの製品等を組み合わせればどうか。例えばしっかりとした暖簾が掛けられているだけで、ずいぶん街の印象が異なる。

辻田： Aユニットの議論でも当初は農林業に触れていたが、消えてしまった。Bユニットも中京・下京の話をコンパクトにまとめてもらった印象。京都市の周辺部分についても考慮し、もう少し、バランスがある形にした方が良いと思う。

金武： A・Bに共通して言えることは、方略における具体策について、複数の部局で取り組まれるようなものにすべき。過去の行政実務では、どこかがやっていたけども足りない、隙間になっているので漏れているというような取組が都市部会で議論されているはず。それぞれの部局でやっていることを積み上げて考えられるような戦略と同じものが今回の戦略で上がってきても意味がない。これまで漏れてきたものに光を当てる必要があるので、複数の部局でやっていることの隙間を埋める、という感覚を身につけていただければ。

委員の専門的な視点からの指摘をふまえると、重点戦略が総花的になってしまう。それでは次期基本計画の3/4をそのままに書いているのではないか、ということになってしまう。それぞれの委員からの指摘に対しても、重要な点を主張して必ずしも受け入れなくてもよい。こういう場合はアイデアの競争であって、抜け落ちている点があってもよい。とんがっているアイデアがあることが必要である。

堀： 例えば環境分野でいうと、行政はどうしても地球環境問題まで網羅したがるが、それに対する取組はできない。問題と課題の洗い出しをして、対応可能な課題について取り組むという視点が必要。

重点戦略を考えている段階であるが、これを計画として定めた後に、どういう推進体制とするかが大切。環境計画を立てても推進体制が無い自治体も多数存在している。計画の策定と体制の確立は両輪となっていく。策定作業に入ったときは、推進体制の確立という視点を持つべき。その時、行政だけでなく、市民との役割分担などを踏まえる必要がある。

西 村： 縦割りの仕事をしてはいけないと思っている。この計画は総合計画であり、この会議では4つの重点戦略を検討していただいているが、分野横断的な計画にし、市民と一緒に横断的な実施体制をつくっていききたい。

由 木： Aユニットについて、どうやって「いちびり」の人々を集め、どうやって動かすのかを考えてもらえると、総花的にならないのではないか。

Bユニットについては、空間、技術だけでなく、食文化、こころの問題など、ベースを幾つか置きながら提案してもらえると、まちの佇まいなどにも上手くはまっていけるのではないか、と思っている。

### (3) Cユニットからの説明

稲 田： これまで、地域コミュニティについて、必要性や衰退したらどうかという基本的なことを議論してきたが、最終的には地域のセーフティーネットとしてコミュニティが必要であり、京都市としても市民に問いかけていかなければならないという結論に至った。

自助と公助をつなぐ共助をテーマに議論してきた。地域コミュニティ活性化懇話会への参加、未来まちづくり100人委員会との意見交換会等も行ってきた。4月以降、懇話会との意見交換を3回程度行ってきた。

今 富： 中間報告以降の変更点は、外に出て議論してきた。大きく2点、重要な点に気付いた。

1つ目は京都は非常に地域コミュニティが豊かな場所だった、という点。

2つ目は、共助のスタンスは、ある日突然生み出されるのではなく、土壌があつてこそ生まれるものである、という視点である。地蔵盆や寺社の空間など、自然に人が集まり、地域の核となる場があつてこそ地域コミュニティがあるということに気付いた。

それを踏まえて、重点戦略のタイトルを「新しいコミュニティ」から、何か新しいものをつくるのではなく、土壌をつくっていくという観点に変更している。

基本的な考え方の①～⑤を提案していきたいと思っている。

方略についても、土壌づくりと、種育てという視点で検討した。

神 吉： 地元でまちづくりの活動団体が定着した経過は、最初から素晴らしい共助のメンバーであったのではなく、いろいろなことを乗り越えていく中で、個人個人の事情や関係性も許容し、地域は必ずしも一様な一枚岩ではないという現状を理解したうえで、中長期の取組を考えていった経過がある。いきなり集まって何かを始めるのではなく、普段からのトレーニングがあつて初めて地域の人たちがそれぞれの立場から、何かを実現し、マネジメントして成長していくというイメージがある。それをサポートする地域アドバイザーの方や、地域でこれまで活動してきた方々がいてこそ共助という

イメージをはっきりと打ち出してもいいのではないか。

どうサポートするのは難しいが、他都市を含めた事例を参考にしたり、活動拠点の在り方を地域の状況に即したものにしていって、やわらかい仕組みを用意して対応力の幅を持たせてはどうか、というアドバイスをした。

**空 閑：** 生活や地域というとらえどころのないテーマであった。議論のプロセスにおいては、中間報告以降、住民が集まる場に出かけて行って、多くの生活の現場を肌で感じてアイデアを出し合う姿勢を体験されてきたことはよかった。地域やコミュニティは美しい観点で語られるが、実は汚い、ドロドロしたものかもしれない。だが、やはり地域力は大切だということを経験できたことがよかったと思う。

**平 井：** 京都市と自治体組織との関わりを表を見ていくと、京都市に住んでいる者として、関わりをもっている組織もある一方、社会福祉協議会など、初めて聞く組織も多かった。生活している人が上手く接する機会を持ってないというところもあるようだ。京都市外から移り住んできた人々を早い段階で取り込むような工夫が必要。

**堀：** ドイツ生活が長かった人に聞くと、手助けが必要な障害者のそばにいた場合、手助けしない人が非難されるのが普通らしい。一方、日本では、先日東京の日本橋駅で階段を上れない車椅子の方がおられたので声をかけたら、駅員が2名来て、私は手伝わせてもらえなかった。助け合いとは何か、ということを考えさせられた。

西京区の北の方ではドブさらいという行事が1年に1回あり、コミュニティを再構築する良い機会ともなっていた。今、その代わりになるのが体育振興会等の運動会などか。その場の食事においても、使い捨ての食器を使うようになって、食器を洗う手間は減ったが、反面地域のつながりが減ったのではないか。

**大 山：** コミュニティの凝集性が高まれば、そこに入れたい人々も出てくる。その方々の関わりをどう考えていくのか。責任を持たせて入れるようにするだけではなく、自然と周辺地域から中に入っていけるような居場所をつくる必要がある。学校現場においても、親に連絡を取れない子がおり、不安定な生活を送っている人々とどうかかわっていくかが重要なテーマとなっている。こういう人に祭などに参加させようとしても難しい。そこで、子どもは地域に自然と溶け込むので、そういう子どもたちがコンビニにしかいられない地域にせず、地域に自然と溶け込めるような場所を盛り込むと、そこに参与する人が関わりをつくれるのではないか。

学校を一つの拠点とするという方略を掲げられているが、明治時代に小学校がつくられたときには、行政的な機能があり、まちのシンボルであったのが、徐々に教育機関となってきた。現在、学校はコミュニティの拠点として期待されすぎている。あらゆるコミュニティの課題が学校に持ち込まれている。そのような問題がある中で、学校に負担が集中しないような形でコミュニティの課題をうまく分業できるような形で、学校がコミュニティに関わっていけないか。

#### (4) Dユニットからの説明

**高 橋：** D ユニ  
ットメ  
ンバー ねがいを「少子高齢化時代のモデル都市」から「誰もがすべてのライフステージを楽しめるまちに」に変更した。行政的な表現から、京都を訪れた誰もがライフステージを楽しめるという視点に変更した。

多世代交流や社会との交流により、自分の成長を実感するという視点から戦略を検

討した。

もう一つの変更点は、各ライフステージの方略について、自分たちのイチ押し策を掲げたこと。その他の方略は一覧として掲げている。その他、各ライフステージの現状なども盛り込んでいる。

一番の売りは、多世代の交流により戦略を進めること、いろいろな世代となって長期的に取り組めること、ライフサイクルの仕組みづくりを行っていることなどである。他のユニットの重点戦略と連携しながら進めていくことを考えている。

重点戦略が「サポート」の枠組みからはみ出しているので、新しい重点戦略のネーミングのアイデアを頂戴できればと思う。

**岡 本：** 日常性、継続性、柔軟性を大切にしたい。Dユニットは、子どもを中心に据え、重点戦略を練っているのだが、人々がそれぞれのライフステージを歩む中でその役割を変更しながら一生を過ごす。例えば、子育てを終えた人が、誰かの役に立つ、また、育ててもらった子どもたちが、誰かを育てる側にまわる、などそれが上手く循環することが大切。

自分も他県からの流入者であるため、コミュニティをつくろうとしたことがあったが、Cユニット、Dユニットが目指しているようなコミュニティが実現し、そういうことをしなくても地域とのつながりができればと思う。

**大 山：** 総花的ではなく、包括的な案だと思うが、様々な要素を、どう人々に認識してもらうのか。プロジェクトのイメージをどう位置付けるのかが大切で、広報も一つの戦略。例えば、デパートの中にあるおむつ交換のコーナーで行政サービスに関する意見交換がなされる。あるニーズを持つ人々の間でネットワークが広がることがある。ある情報を一覧で示されるだけではよくわからないが、口コミなどでリンクが張られる。時間軸で方略が並べられているが、関連性に注目して、どういう風に打ち出していくかが、実現性を考えるうえで必要。

「サザエさん化プロジェクト」が挙げられているが、「サザエさん」を見ているとほのぼのするが、病と死が出てこない。ほのぼのした社会では、避けていることも多い。苦しく、悲しい状況をどう支えあうのかもライフサイクルの中では重要。

駄菓子屋が昔は多くあり、居場所のない子にとって重要であった。以前、チェコに行った時に、街にビールを売っているブースがあり大人が集まっているが、子どもたちもそのまわりにやってきて、自然に教育や関わりの場が生まれている。日本では、しつけを家庭に還元するが、東南アジアは元々屋台文化であり、屋台が人の集まる場所であった。人々の生活を支え、それぞれの世代の人々が関わっていく過程で、教育の場を地域に広げていくという観点まで踏み込めば、京都スタイルを発信できるのではないか。

**金 武：** アイデアの競争なので、一番伝えたいことを掲げることが必要だと言わせてもらったが、それぞれの専門の立場から助言をいただけることが重要。Dユニットの議論は事前の説明よりも良くなっていると思う。

U18のウォークラリーについて、小中高の合同授業という提案があったが、体育のクラブではそういうことはあるかもしれないが、それ以外ではないのではないかと、ということに気付かされた。

京都は宗教都市でもあり、生死について考える土壌がある。京都力の議論の中でも、大山委員のサザエさんに関する指摘を考える必要がある。

辻 田： Dユニットの議論にもソーシャルキャピタルの観点がある。それぞれの提案に参加する人々にとって実際にどういうメリットがあるのかが明確である。他のユニットについても、参加する人々のメリットを明確にすれば、市民の人々が共感できる基本計画になるのかな、と思った。

新 川： Dユニットは具体的でありつつ、実現できそうだ、という観点で高い評価を受けているようだ。

神 吉： 若い世代が、助けてもらう側というだけでなく、例えば子どもにも社会の中の共助の役割があるはず。居場所の議論があったが、社会的役割を与えられている子どもの役割といった視点もあってよいと思う。

新 川： サポーターというよりは、それぞれのライフサイクルの中で共助の主体となるという視点か。

秋 月： 全ユニットを通じ3点気付いたことがある。

1つは、京都について再定義が必要だということ。ある程度、コアの部分を共有することが必要である。

2つ目は、発信力。京都はネガティブな方向の発信力が強いが、プラス方向の発信は非常に重要であるが、所与のものではない。

3つ目は、組織体制に固執せずに取り組むこと。組織をいじれば、ある問題が解決されるが、新しい問題が出てくるのが常。

気になるのが今後、AからDの努力をどうまとめていくのかということ。計画プロセスとのリンク、一体性があるかどうかという軸と、実現性があるかどうかという軸で、審議会での議論のたたき台となるかどうかを判断する必要がある。

堀 田： 自然に動いていくのはDユニットの提案かと思う。京都改造ミッション。

由 木： Cユニットについては、コミュニティの活動は地域の価値を高めるという説明があると今日的になる。

Dユニットについては、世代間交流という観点があってもよいか、と思う。

## 2 未来の京都創造研究会報告（案）の構成等について

事務局： 資料2により説明する最終報告は、第一篇と第二編の構成としたい。第一篇は、中間報告そのままである。第二編は、未来像と重点戦略であり、研究会の案として提出していただいた後、審議会の検討素材としたい。

重点戦略のうち、研究会報告の本冊には概要を掲載し、その他の部分は別冊としてとりまとめたい。

資料2の別紙は、京都の未来像の説明として、最終報告の中で記述したいと考える内容である。

新 川： 研究会報告の内容について、意見等あるか。

金 武： 2, 3回目の研究会で触れた行政刷新については、中間報告で述べた内容に含まれているという理解でよいか。

事務局： 中間報告の中の行政経営の一体化という部分で記述している。

金 武： 京都橘大学が所在する山科区において、区の基本計画の準備が始まっている。今回の研究会において、これだけ思い切ったチャレンジ、手法の提案があったが、区の基本計画の作り方が10年前と変わっていないように見える。いかがなものか。

事務局： 区の計画については、地域の特性に応じて策定することとし、取組を開始しているところ。

10年前はどうやって策定すればよいか分からない中で策定を行った。今回は、それぞれの区で「住民円卓会議」を設け、区の基本計画がどうであったかを議論し、その結果を基に区基本計画の策定委員会で議論していただくことになっている。

この研究会では市全体の基本計画の議論を行っているが、区の基本計画策定においても参考にさせていただくことにしたい。

新 川： 「基本計画」という名称はいかにも手垢がついている、硬いというイメージがある。市民的に親しみやすい名称にしてはどうか、という考えはこの場にいる方々の共通の認識だと思う。そこで今回、プロジェクトチームからアイデアを参考に用意してもらっているので、意見を出し合えればと思う。

大 山： 「未来くんと都ちゃん」の時代から変わっていない、どこかで見たものばかりという印象。

もっと新機軸を打ち出す名前を考えたい。

新 川： 名称については、一任していただき、決定したいと思う。これは、というアイデアがあれば、各委員から頂戴したい。

### 3 閉会

由 木： 座長をはじめ、委員の皆様にご挨拶申し上げたい。

計画を策定する前にこういう形で議論を行う取組を初めて見た。京都市は色々先進的な取組を行う都市であると思う。

プロジェクトチームの皆様、御苦労さまでした。この苦労は、後から、かけがえのない財産だと思うだろう。

中間報告については、基本方針にそのまま反映したいと考えている。

未来像、重点戦略については、基本的には未来像はこれをベースに考えていきたい。重点戦略は、中身次第だと思う。重点戦略を市長が見て、採用すれば、基本計画に掲げればよい。

先の見えない時代だからこそ、ある程度ビジョンを持ちながら、何から変えていくかを考えなければならない、それが未来像と重点戦略である。基本計画を組み立てるプロトコルとして活用していきたいと思う。

皆様の多くの思いがあると思う。とりまとめについて座長に御苦労をかける。

審議会設置に向けて、このメンバーとどういう人的繋がりを持っていくべきかという点も検討していく。

新 川： 本日をもって、未来の京都創造研究会の委員が集まったの活動は終了となるが、このメンバーの中から審議会のメンバーになれる方は、人的な繋がりを持っていただければと思う。

それでは、本日の会議を終わる。



今後は、本日の議論も踏まえて、研究会の最終報告書としての形に取りまとめ、事務局から各委員に内容の確認をさせていただく。最終的な取りまとめは、座長の一任とさせていただき、研究会の成果として7月中には、市長に提出したいと思う。

5回の研究会、充実した研究会を委員、プロジェクトチーム、事務局と一緒に進めてくることができた。改めて感謝申し上げたい。この研究会の傍聴者に対しても御礼申し上げたい。9箇月間の長きに渡り、活発な研究活動を推進していただいたことに御礼申し上げる。

(21:20 終了)